

昭和二十四年七月二十五日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第三〇九号）

慈

光

第二十七卷

第二号

次

目

信楽開発	近角常観	(1)
求道の中心	福島政雄	(8)
かたおもい	柳瀬留治	(13)
高原憲先生聞書	平岡坦	(15)
念仏詩抄	木村無相	(18)
ともし	花田正夫	(21)

信 樂 開 発

近 角 常 観

信巻別序の最初に

夫れおもんみれば信樂を獲得することは、如来選択の願心より發起す、真心を開闡（かいせん）することは、大聖矜哀（こうあい）の善巧より顕彰（けんしょう）せり。

と云われた。信仰は我々が求めたので出来るのではない仏陀の慈悲よりあたえられるのである。仏陀の慈悲は南無阿弥陀仏である、光明である。この名号の父と光明の母とによって生み出された信心である。これによりて如来の慈悲をば利他の願海と名づける。利他という所以は、我等から進んで救われるのでなしに、仏陀から救うて下さるのである。そこで他力という意味は、仏陀から手を下してたまわるので、この仏陀の慈悲の御手が我等にとどいて下さったところが信仰である。

換言すれば絶対と相対との一致である。この一致ということ半仏半人の持合いと考えるから、絶対他力の信仰が味えぬのである。真実の信仰の上では仏と人との持合いで

はない、勿論、南無阿弥陀仏は仏の物なれども、それが我等の口によりて称えられるところの信心である。信仰はまたもとより我等の心に出て来るに相違ないが、それが全く仏より来りたのである。であるから絶対相対の一致というは水と油とを一つにした如きではない、我等の信仰は仏力の外にあるのではない、仏心と凡夫心と両者の寄合にあらずして広大の仏の恵みがまるまる我等にあらわれて下さるのである、これが絶対他力の信仰の妙味である。

我等の心中に仏陀の真心が到達してあたかも蓮華の開く如く、我が心が開けてしみじみと仏陀を喜ぶ心が生じ来るのであって、これまったく仏陀の偉大なる力である。我心いつとなく仏の慈悲が有難く思われて疑わんとしても疑わねず、真に心が開けて来たのは、自分がかくありがたく思わんとして思えたのでなく、全く如来選択の願心より發起せしめられたのである。親が子を可愛い／＼と常に断えず思うていて下さるので自然に子供の心に親はありがたいという心が起ったのである。親鸞聖人が、

「それおもんみれば、信樂を獲得することは如来選択（せんじやく）の願心より發起す」

を喜びたまう意を和讃に

釈迦弥陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

我等が無上の信心を

發起せしめたまいけり

と云われたのは、一寸聞くと何でもないようであるが、かくの如く云われるのは決して偶然ではない。私自分のことを回想するに、或は宗教上の事を憂い、或は友人の事を憂い、種々なる人生實際の出来事に遭うて種々に考えた、それがために永い間自分の胸中に安心が出来ず、大なる苦におちいった。何とかして安心を求めたいと悶えに悶えた最後において、仏陀の恵みが私にわからして下されて、アアありがたいと喜んで安心することが出来たのである。ここにおいて、つらつら思うに久しい昔から私に種々に恵みをかけて下されたその仏の真実の願心、念力が私にとどいて下されたのであった。こうしたことから思うに、信巻は親鸞聖人の実験の直写である、聖人の胸中には人生百般の出来事みな我を導いて下さる如来願力の御はからいであって、釈尊御在世当時の王舎城の大悲劇も外へ遣ることは出来ぬ、みな色々と手をまわして凡ての人間を信仰に入れるべく導いて下されたのである。「真心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顕彰せり」と申されたのである。そこで我身が回りまわって仏の恵みに入っておりがたい心になったのは、ひとえに仏陀の願心の賜であると感謝して居られたのである。已上の如来選択の願心と大聖矜哀の善巧と

と讃歎せられてある。我等はこの和讃を口先で誦んで仕舞ってはならぬ、或は財産を失うて驚いて信仰に入るもあり、愛妻愛子を失うて驚いて信仰に入るもあり、或は一家が平和で楽しいところから信仰に入るもあり、其他すべて人生百般の出来事、小にしては一家の不和より、大にしては世界の紛擾までが必ずや終にはこれによりて目を醒まし信仰に入らねばならぬように余儀なくせらるるは争うべからざる事実である。かく人生の出来事から余儀なくせられて仏の恵みの懐に入らざるを得るようになって、大いによろこぶことを得たのは、つまり久しい以前から釈迦弥陀二尊の慈悲の父母達が、種々の善巧方便をもって我等に広大の恵みを向けて居て下さった仏陀の念力のあらわれである。この方便というについて世間にはうそも方便という諺がある、仏教専門の方でも権化（ごんけ）方便とか、善巧（ぜんぎよう）方便とか種々の名をつけて方便を論じているが、私が考えるに何れも皆我等を導いて仏陀の恵みに入らしめんという、慈悲善巧の手段であるから、善巧方便

のほかないと思う、蓮如上人御一代聞書に、

方便をわろしといふことはあるまじきなり。方便をもつて眞実をあらわす、廢立（はいりゆう）の義よくよく知るべし。弥陀釈迦善知識の善巧方便によりて眞実の信をば得ることなるよし、仰せられ候。

又、末灯鈔にも、

この信心を得ることは、弥陀釈迦、十方諸仏の御方便より賜りたりと知るべし、然れば諸仏の御教をそしることなし、余の善根を行ずる人をそしることなし。

と云うてある。ややもすると何気なしに信仰を發したる如くに思うが、その実は大聖釈尊をはじめとして諸仏菩薩みな同心にて広大の恵みを我等に与えんがための善巧の計（はか）らいによりて信仰に導いて頂くのである、これに気づかぬから自分で信仰を作らんとするあやまりにおちいり易い。よりにて信巻にはまた、

然るに常没の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じ難きには非ず、眞実の信樂實に獲ること難し、何を以ての故にいまし如来の加威力（かびりき）に由るが故に、ひろく大悲広慧力（こうえいりき）に因るが故なり。

と云うてある、如来広大の威力が加わって下されたから信仰に入つたのである、広大の智慧の御力が加わって下されたから眞心を獲たのである。我れ自らの力によって作つた

信仰ではない、偶然に生じた信仰でもないのである。私如き浅ましい罪業深重煩惱熾盛の胸中に、仏の恵みを喜ぶ心がこつて称名歡喜することの出来るのは全く仏陀の眞実から來つたのである。この信仰を金剛不壞の眞心とも眞実の信樂（しんぎよう）とも名づけるのはこのためである。

然るに仏陀の眞心から來つたでなしに、自心に仏陀を作り出してこれに對して有難く思おうとするのは元來が凡夫の心であるから、眞心とも不壞ともいふことが出来ぬ。ただはからわずに仏の恵みをありがたいて頂く信仰のみが、顛倒ならず虚偽ならざる眞実の信仰である。その信仰の内面の状態を云えば、一面は我身が悪いものであるという自己の価値がわかつて、一面はこのような自己を救いたまう仏の恵みを疑ふことが出来ぬのである。善導大師は、

一には、決定して深く自身は現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなしと信ず。

二には、決定して深く彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を攝受して疑なく慮（おもんばかり）なく彼の願力に乗じて定めて往生を得と信ず。

と云われた。これを古來二種の深信（じんしん）即ち機（き）の深信、法の深信と名づけてある。

今この實際の心中を譬えれば、監獄の囚人が一回ならず

二回ならず犯罪を重ねて度々入監して苦しんでいる。囚人の心情を察して見るに、どうかしてここを出たいと思つて居るが、どれだけ思つても出ることが出来ぬ。そこで如何な兇惡の者も出獄の後には改心して立派に社会に立ちたい、こんど監獄を出たら改心しようと思つている。これを他から考えると、如何にももつとものである、もつともではあるがそれならば果して其の囚人が社会に出て立派に改心出来るかというに、實際はそうはいかぬ。囚人自身は改心して立派になる積りでも、先ず自己の罪惡を蔽う虚栄心のために、成るべく他人が身の上を知つてはならぬと世間を狭く見て、百万心配してそれがために業務も手に着かぬ、又親に對してさえ隔て心をもつてむかい、親も寄せつけてくれぬだろうと思つて、親の処へ帰ることもようせぬ。親許へも帰らず忖きもせず、世間を隔てて苦しむから遂にまた惡事を犯して監獄へ舞いもどつて來るといふようなものである。信仰問題もまたこのようである。常に云う如く私の信仰で云うてもそうである、自分では善くならぬばならぬ、人がこちらを惡く思つても、こちらでは先方を惡く思つてはならぬ、心を清くせねばならぬ、誠実でなければならぬと思つて、朝夕に誓つて見たり、日記を書いて見たり、一日だけでもどうか善くしようとかかつて居ても、夕方になつて見ると駄目である、一日はどうかこうか

やつても翌日は駄目であるという次第で、今日こそ／＼と氣を張っているが、一年中とうとう駄目に終つてしまひました。あだかも囚人がこの次には改心せん、この次には改心せんと勤めて見ても如何にしても出来ぬと同じことあります。どれだけ企てても善くなり得ぬ。右に向つても心が隔てる、左に向つても隔てる、右にも左にも動けぬ。善導大師の實驗のように、右からは群賊、左からは毒蛇、その間にまた異學異見のために惑亂せられて、一層こうしたら、あしたらと一向に心がきまらぬ、右にも左にも進退きわまつた状態をば、世人はこれを稱して罪惡觀というたり、或は機の深信であるかの如くにいうものがあるが、それは誤りである。

一寸考えると「我身は罪惡のものなり出離の縁あることなし」という大師の告白はこの苦しい境遇を云うたものの如く思われるが決してそうではない。今日學生諸君が自分は罪深き者であると苦悶しているものが少くない、又信仰を求めて道の話を常に聞いている者でも、私ごとき者はとても救済には預られぬと歎いて居るものがある、それらは煩悶状態で決して罪惡觀ではない。彼の囚人が自分は如何にしても駄目であるが、それでもどうかしてよい方法をもつて改心したい、或は大発明でもするか、奇抜の行動にでも出て、金もうけでもして好い境遇を開きたい、善くなり

たい、成功したいと云うているうちに、ついまた第二の犯罪をするのと同じ道理である。学生も信者も、我身は罪深い者であると思つても、それでは安心して居られぬ、唯歎いて日夜苦しむばかりである。彼の千仞の断崖から落ちかけたものが、草の根や木の株をつかんで、立つても居られぬ思いで自力を出してしきりに苦しんでいる如き心地である、未だ信仰とは云われぬ。囚人がどうかして成功したい、何とかせねばならぬ、親許に帰るにも好結果を得て帰らねばならぬ、たとえ出来ぬまでも為さねばならぬと思つるのは、未だ親の心が解らぬのである。

そこで一番進んで、その囚人が如何にして安心出来るかというに、何も他の事はない、親の心を知らしてもらえばそれでよろしいのである。普通の囚人も親を全く知らぬとは云われぬが、親は私如き者を一向振り向いてくれませんという人が多い。人生を色々考えて、神も仏もありませぬ、人間とても皆温かい情などはないものであると、この様に思っているのは、此囚人と同じ心持である。これらは余程ひどいのであるが、一歩進むと少し気がついて神仏でなければならぬ、人間は皆罪惡の者である、どうしても人間以上のあるものに依らねばならぬといっている。それならこの人は真正に仏陀が解っているかというに決して解って居られぬ。これは丁度囚人が親は私如き者を憐れんで下さ

もんばかりをめぐらして大悲の御力に依られ、全く似てしかも非なる信仰である。

然るにいよいよ如来の広大の御恵みを聞かされて見ると何かなしに一すじに如来の御恵みに感泣して喜ぶより外は無いことになる、ここが真正の信仰の極致である。囚人の例にして見ると、親は汝如き者は失敗墮落の不埒者（ふらちもの）だから、帰って来るな、でなしに「我如き不孝者を屋夜すこしも忘れずに待つて居て下さるのであったか」と真に親の心を聞かされて見ると、心の奥底からああ有り難いと喜ぶばかりである。この時に罪があるから帰られぬの、衣裳が悪いからの、土産が無いからの、と云うている余地は無い、直に飛んで帰るばかりである。

そもそも善くなれると思つてゐるのは善くなれぬ所以である、すでに罪惡におちいった者がよい加減に自分の力で立派になれると思つてゐるからいかにぬのである。真実に自分の悪いことに目醒めた者は、自分は仕方のないギリギリである、崖の下に落ちて仕舞うた仕方のない者である。親はその様な者が立派になつて帰ろうとは決して思つて居られぬ、唯もう何かなしに直に帰つて来よと云うて下さるのである。いよいよ崖の下へ落ちるより仕方のない者の上に、とくより一仏名号の繩が下つてある故に、これに安んずるなり煩悶の手を放つことが出来るのである。唯信鈔に

る、自分に如何なる間違いがあつても、それをいろいろと善く思つて下さるが親である、いかなることがあつても捨てて下さらぬありがたき親であると思つてゐるから、そんならば真実に親が解つてあるかというに、口には親はありがたいといつて居るが、心底には親の眞実が未だ解つて居られぬ。その証拠には直に親許へ帰られぬ。何故かと尋ねると、親は寄せて下さるけれども、チット善くなつて帰らねば済まぬ、立派な衣裳でも着て帰らねば面目がない、どうか世間の面目をよくし土産でも持つて帰りたい、いまのままでは如何にも恥かしいところという氣である、それだから直に帰られぬ。今日の信仰問題でもこれと同じ筋道に滞っているものが少くない。自分は如何にも悪い者であるが、仏陀はこの如き者を助けて下さる、實にありがたいと口では云うている。或はまた、ただのただである、自分は何にもいらぬと云うている、しかも心底から眞実自分を恵んで下さる仏陀がありがたいといふことに氣づいて居られぬ、唯自分の心を取り立ててこの如く思つてゐるだけのものが多い。「疑なく慮なく彼の願力に乗ずる」にあらずして、彼の願力に乗ぜずして自らかくの如く思つてゐることを以てわれ得たりといつてゐる。一面には出離の縁あること無しと云いつつ、なおどうかして出離し得るが如くに思ひ一面には、疑なく慮なく彼の願力に乗ずると云いつつ、なお疑うまじとお

たとえば人ありて高き岸の下にありて上ること能わざらん力強き人岸の上にありて綱をおろしてこの綱にとりつかせて我れ岸の上にひきのぼせんと云わんに、ひく人の力を疑いて綱の弱からんことをあやぶみて、手をおさめてこれを取らずば更に岸の上にのぼることを得べからず、ひとえにその言に従つて掌をのべてこれを取らんには、即ちのぼることを得べし。仏力を疑ひ願力をたのまざる人は、手をおさめて綱を取らざるが如し。菩提の岸にのぼること難し、ただ信心の手をのべて誓願の綱を取るべし。仏力無窮なり、罪業深重の身を重しとせず、仏智無辺なり散乱放逸の者を捨つることなし、ただ信心を要とす、其の外をばかえりみざるなり。

と云うである。綱につながれよと云う如く、仏が綱さげてつかまえて下さるから、自分がもがかずとも手が放される。もがくのはまだ罪惡の凡夫といふことに虚榮心がまつわるからである。自分も悪いものではあるが、人もまた善からぬものであると思つてゐる、まだ自分は至極の惡人なりと思われぬからである。親の自分に対する慈悲の廣大なることを思へば、今までは親を忘れて、親の恵みに氣づかなかつたのであつた。親が知れぬから曠劫以来昔から今日まで、これがために迷ひ、これがために流転して来たのであつた。自分が力味んでやつても、どんなことがあつても、

この三界の牢獄は出られぬのであった、この如き者を捨てずして直に帰り来れと喚びたまは、大悲の御親ばかりである、ああ有り難い、実に親の恵みが尊いと気づいたところではじめて安心して苦しむことが無くなる、そこで心から自己の価値が分かり、真の罪惡観が起るのである。

この如く親の恵みに気づく所以のものは、独り考えて気づくのではない。父親は寄せつけぬと怒る、母親は帰って来よ、わびをしてやるといふ、親戚朋友からは老親が心配している、早く帰って来よというて勧めてくれる。それがために囚人の心に成程親は有り難いという心が起る。ここが所謂「信樂を獲得することは如来選択の願心より發起し、真心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顕彰せり」というところである。

はじまりは囚人が、親が今のように叱ってよこしても、その言辭を大層苦にして、親の恵みという点は一向解らぬように、釈尊が「唯五逆と正法を誹謗せんをば除く」というのを聞いて、我が如き五逆の罪人は到底たすからぬと力を落すか、もしくは母親が帰って来いと云うから自分は悪くてもよいのだと云うて居るが如く、我は罪惡深重の者なれども、仏はこれを許して下さると思つてゐる。いずれも誤謬である。親心が解らぬのである。親の有難味の解らぬ者は、仕事に精出しもせぬ、惡事もやめぬ、そうでなければ

れば気がねして苦しんでいる。真に親心が解つてくると叱られたときも、真実しかつて下さるは親ばかりであると喜び、愛して下さるときも、我が如き不孝者をその様に云うて下さるは勿体ないと、叱つても愛してもどちらでも有り難く頂けて何の遠慮も会釈もなく親の家庭に帰って行く。信仰問題もまたこの如く大悲の御親の恵みの聞えた瞬間、彼の願力に乗じて一点の疑慮もなく定めて往生を得と安心する、これが信樂開發である。身は鉄窓に在つても心は親の処に帰つて居るのが所謂正定聚である。即得往生である。これを和讃に

超世の悲願ききしより我等は生死の凡夫かは

有漏の穢身はかわらねど心は淨土にすみあそぶ

此上になお云うべきことは囚人が在監中は常にひもじく感ずる、どれだけ食うても足らぬ、又何事にも不満足であつて従つて仕事は苦勞でならぬ。そのうゑ獄吏を見ること仇敵の如くであるから、獄吏からはなお同情を失うようになる。ところが仏の慈悲がわかつてくると心がすなおになつてくるから、獄吏からは自然に親切に扱われる、不思議にも与えられたもので満足もするし、仕事も楽しんでやる事が出来る。そこで仮出獄の恩典にあずかれるようになる。しかも囚人自身は仮出獄になるなどとは夢にも思つて居らぬから、申渡された時は意外千萬であると非常に喜

ぶ。反対に人間のはからいで改心を装うて一時謹慎をして立派になつて、刑期が満ちて放免せられても、社会へ出て見ると中心が開けて居らぬから気が隔てて身の置きどころがない、又再び監獄へもどつて来ねばならぬようになる、つまり身は放免になつても心が牢獄に在るためである。これに反して在監中に信仰に入つたものは、すでに心は家庭に遊ぶのである、監獄を出るとすぐああ有り難いと直に飛んで親の家に帰つて行く、今我等もまたこれと同じである。

この三界は監獄である、極樂は仏の親の家庭である。そ

の一如法界の家庭から形をあらわして、親心を知らせんがために、釈尊も十方の諸仏も、其他の大聖達もこの人生へ出現して下されたのである。我等はこの仏陀の教を聞いて有り難いと喜ぶとき、この世の監獄に在りて早くすでに心が極樂の家庭に歸っている。そこで此人生の苦惱は苦惱でなく楽しんで人生の本務に従うて行く、しかして受け来たつたる命数の尽きる時、ただちに極樂界に入ることが出来る。以上述べた信仰の内面の味は、善導大師の水火二河の譬喻の上に丁寧に示してあります、引き合せて味われることを望む。

求 道 の 中 心

晩年の親鸞聖人

聖人について、たとえば、吉川英治さんの親鸞というあの本を私は読んだのではないけれども、いつかラジオで放送していたところ、少し聞いたことがある。聖人のお若い時の姿を大分尾ヒレをつけて物語つてあるようであつた

その吉川英治さんは、なんでも若い時の親鸞はえがくことが出来るけれども、晩年の聖人をえがくことはなかなか

福 島 政 雄

むつかしいと、いつておいでになるとか伝え聞いている。

ところが私自身はもう大分、十年ちかくもなろうか、まえから、京都の方で今は故人となつておられる方から、晩年の親鸞聖人を書いてくれと頼まれていたのである。そのお方は足利淨円先生のお婿さんに当る方である。ところが私も晩年の聖人はなかなか書けるものでないと思つて、ここ数年経たが、昭和三十一年の夏、一つ書いてみようといふ

気になって、夏の暑い時にずっと聖人の晩年をかいてみたのである。それを京都の永田文昌堂で出版してもらった。小さな本であるが、あとでその道の方々のご批評を聞いてみると、「福島さんならああ書いてもよからうけれども、どうも史実と大分違っているところがあって、いかげんのものだ」というような大分酷評をうけている。

しかしそれは私としては一生懸命になって書いたつもりである。ことに私としては及びもつかないと思ったのは、あの自然法爾章、あのところの聖人のお心というものは、私にわからないのである。わからない私が何かわかったような風で書いているが、実際、親鸞聖人は晩年いよいよ深くなっておいでになる。そして非常に深く感ずることは、六十歳、七十歳、八十歳、九十歳近くまで著述の筆をすすめておいでになる。たしか八十八歳位で書きになったものが最後のものではなからうか。非常に晩年まで頭のはたらきのしっかりしたお方であったということを感じるのである。

私は若い時に、アメリカの心理学者の研究を読んでみたが、普通の人間の脳というものは五十五歳ごろからそろそろ駄目になる、すこしすぐれた人であれば、六十五歳頃からそろそろだめになる、それがある程度まで進むと老耄状態になるというのであった。

じている。お手紙は晩年のもののようにあるが、あのお手紙を私は若いころから大変感じて拝読している。というのは、あのお手紙を読んでみると非常に心持が広いのである。ご承知の通りに「よろづの仏菩薩を軽しめまいらする」ということは間違っている。自分が今日弥陀の本願にまで遇うようになったのも、いまの仏菩薩、あるいは天つ神、国つ神のお導きのお蔭で、今仏の本願に遇うということになったのであるからして、みんな天つ神、国つ神、もろもろの菩薩がた、み仏たちは、自分のための善知識である、おろそかにしてはならない、そのご恩というものを忘れてはならない」というようなことをいっておいでになる。そういうところに、非常にこのお心の深いということを感じるのである。

それから、そのほかに感ずることは、決して聖人は、たとえ一人悪い人間がいる、悪い人間は自分が説いて聞かせて改めさせてやろう、というようなこんな態度には決しておなりにならない方であった。縁の熟する時を待っているというのである、常陸の国においていた時に、大へん悪いといわれている者がいた。それには自分は近づかないようにしておったということがお手紙の中にある。というのはつまり縁ということを非常に大事にお考えになった。縁があればまたどういう人でもこの仏の道に眼

私がまだ若い頃、仙台の第二高等学校でドイツ語を教えていた時の生徒で、今では立派な学者になり、呉の医科大学で、人間の脳髓の解剖専門で教授である鈴木君がいる。

その人に大分前にそういう問題を尋ねてみたことがあった。「なるほどそれはその通りだ、それはだんだん老年になってくると、脳の組織の中に砂粒のようなものがたまってきて、ある程度まで進むという老耄状態になる、ということは本当である。しかし失望してはいけません、人間の脳髓というものは適当にこれを使っていけば、晩年極く高齢に達するまで脳のはたらきは発達してゆくものです。それで大文豪のゲーテなんかは晩年になってから大脳のひだがもう一つふえたに違いないというようなことをいっている人もある。だから決して失望してはいけません」といって私を励ましてくれたのであるが、そのことから考えると聖人は晩年脳を適当にはたらかせておいでになって、それが若い時からなかなか鋭い一面をもっておいでになったが、晩年円熟しておいでになるけれども、やっぱり根本の鋭さというものは、それが柔げられたかたちにおいてのこっておいでになったということを感じるのである。またその柔らかさというものは若い時からあったように思う。私は聖人のものをそんなに精読しているわけでもないが、歎異抄はもちろん拝読しているが、聖人のお手紙に感

が覚めてくることになる、その時を待つというながいお心なのである。決して自分がその悪人を感化して改めさせてやろうというような調子ではない。

それからもう一つは、この念仏をやる人もあるが、決してその人を憎むようなことがあってはならぬ。そういう人があったならばお気の毒であるという感じをもつ、この念仏の教えをにくみする人を反って憐みの心をもつてみるように、これは法然聖人のみ教えであるというように、ことを書かれてはお手紙、「笠間の念仏者のうたが問われたこと」というお言葉ではじまっているお手紙であるが、聖人のご親筆も残っているということである。あのお手紙には非常に私は感激している。そして悪いものをお助けであるといって、わざと悪いことをするのは非常な間違いであるというように、懇々とお誠めになっている。

それらのことを考え合せて、聖人の晩年のお手紙というものを拝読すると、心の広いそして決して自分こそ先覚者であるなどというようなお心持をみじんも持っておいでならぬ、ほんとうに愚禿親鸞のお心持であられる。こういうことを感ずるのである。聖人のお手紙に私はそういう点から親しんでいるのである。もっともお手紙の中には、だいたい難かしいことを書いてあるが、それでなく、今の問題に触れたことを実にありがたく頂いているのである。

二河と白道

そういう聖人のお心持を汲んで、そして、真宗のお説教をお聞きになっている方は、繰返しお聞きになっている、あの二河白道のお譬えについても、私はすこしあれの受取りかたが違ふところがあるのである。

というのは、あの二河白道の譬えで、西の方に向つて求道者である行者がゆく、忽ち眼の前に恐ろしい河があらわれる。南に火の河、北に水の河、そしてその火と水との間に一筋の広さ四、五寸というような狭い道が、こちらの岸から向うの岸に通じている。そうすると、うしろの方から群賊どもが追いかけてくる。右に左に避けようすると、右から左から猛獸、惡獸、毒虫のたぐいが押寄せてくる。この行者は絶対絶命になつてその河岸に立止つていると、この河の東の岸、こちらの岸から声が聞こえてくる。

「汝、決定（けつじよう）してこの道を尋ねて行け、必ず死の難なからん」

心を定めてこの道を尋ねて行けよ、決して死の心配はないから、という声が聞こえる。この声が終つたかと思うと向うの西の岸からまた、喚びかけの声が聞こえる。

「汝、一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん」という声が聞こえる。それでこの人が元氣を振り起して、一歩二歩と踏み出してゆく。その時にうしろの方から近寄

つてきた群賊どもが、もうその河岸のところまでやつてきて、あなたはなぜそんな危いところを進んで行くのですか、われわれは決してあなたに害を加えようというのではない。その時はもう群賊、惡獸のすがたでなくなつていゝる、立派な姿になつていゝる。けれども、その人は一筋に進む。忽ちにして百歩ばかりの西岸に達するといゝう。あのお譬えであるが、あのお譬えは、私は次のように頂いていゝる。

はじめに四五寸の狭いまつ白に見える道がこちらの岸から向う岸まで通じていゝる。ちよつとそこをわたりかねる。なにかそこを網渡りでもするような氣分でないかなくてはならぬ、とそういう風に見えるときの四、五寸の白道といゝうものは、お前は正しい道を行つて誠の国に行け、といゝう風のところがその譬えにあらわれていゝるかと思ふのである。

いよいよ踏み込んでゆくときに、その行者は決して四、五寸の白道の上を綱わたりするような氣持で歩んでゆくのでなくて、一歩踏み込んだ時に行者の足は河の底についていゝる。火の河、水の河といゝうのは、行者の体からふき出すところの水の河は食欲の煩惱であり、火の河は瞋恚の煩惱である。けれども一歩踏み込んだときに足は河底についていゝる。そうであるから、これから進んでゆく道は四、五寸のせまい危かしい道でなくて、親鸞聖人がおつしやつていゝ

る「大般涅槃（だいはつねはん）、無上の大道なり」まことの悟りの世界へ通ずるところのこの上もない広々とした大きな道だとおつしやつていゝるのである。それが私に非常に響くのである。踏み込んだ時に行く道は決してこの危かしい道ではない、危いと思ふものは自分の体からふき出しているものである。そうして群賊と見たものが、立派な姿になつてみえる。

こういう解釈では、皆さんご賛成にならないかもしれないが、始めに群賊とみえたのは、たとえば孔子の教といゝうものは、非常に立派な教えであるけれども、自分はその孔子の教のまますやろうとすると、それはなかなか出来なないで、自分としては、死ぬよりほかはない、いわば孔子の教えから自分が殺されるようなことになる。キリストの教えであつてもそうである。そのほかのむかしから聖人哲人の教えといゝうものは、立派な教えであるけれどもその教えの通りに自分が実行してゆくことができないから、その教えを説く人があつたかも知自分の命取りであるがごとくに感ずる。けれども一歩この本願の道に踏み込んでゆくといゝうとそれらの他の教えといゝうものが、みんな自分の姿をうつし出して下さるところの永遠の鏡になる。

孔子の教えでも、ソクラテスの教えでも、キリストの教えでも、その教えのままに実行はできないが、自分の姿は

こういう姿であるといゝうことを、その教えの鏡によつて知らされるものである。したがつて、本願一実の大道に踏み込んだものにとつては、東西古今のこの立派な方々の教えといゝうものは、自分の姿をみるころの鏡になる。みんな尊い教えである。それによつて自分といゝうものが、こゝういゝうみじめな姿であるといゝうことを鏡にうつるようにならされるのである。

こゝうなるから、世界のあらゆる立派な教えといゝうものはそれを排斥すべきものでなくして、こんな我身を照らすところの鏡といゝう意味で自分にとつて、それぞれ大切な教えである。ただ自分の進むは本願一実の大道、これより他に自分の進む資格がない。こゝういゝうことになる。こんな風に二河白道のお譬えを味わつていゝるが、いかがであらうか。ご批判がいただきたいのである。



かたおもい

(新春漫筆)

柳瀬留治

世に男女の恋に片思いというのがある。思いが通ぜず、一方だけが勝手に思いこんで悩んでいるのです。また世の大抵の親がわが子に對し、思い悩んでいる思いも、多くは片思いになり、親の心、子知らず、なのが多いようです。たまたま親を思うにしても、自分の都合や、勝手なところからの思いで、自己中心のことが主になっています。

かたおもいとは、思いと思いがぶつかってクロスせず、互に行き違つて、相合わないのです。それについても、仏が我々の悩んでいるのを御覧になつて、あわれにおもひ、大悲のみこころをそがせられるそれが、全くかたおもいに終らせて来たことを、今、私はいたく感じ、かたじけなく、申訳けなく、有難く思われて、念仏しているところです。

仏の大悲のみこころは、我々の行先がまっ闇で、さびしい心、喜びのない、おのれの功利からよるこびを得たいとか、おのれを満足さしたいばかりで悩んでいるところ、それに対し、仏が、それが満たされたり、思うようにならない

い、それがあわれなんだ。その貧しく淋しい汝、いかに空虚でたよりなく、遣(や)り場がなく、仕様がないたろう。無量永劫それがみたされないんだ。それを憐れんでのこの念仏だ、これを称えよ、とのお慈悲の念仏なんだ、と我々に恵んで下さる念仏のお粥なんです。

さらにいえば、信仰も、喜びも、固い物は一切喉(のど)を通らない私に、唯念仏のみだ、と恵んで下さるお粥なのです。これが我々にむかつての仏の思いです。

そこで、私共の仏に對しての願いはどうか。私共の願いは、こちらが念仏をよろこび、明るいところになりたい、満足したところになりたい。苦しみ悩みを取り除いて欲しい、といった願いをもつて仏に掌(て)を合わせ念仏するのです。

ところが、仏の仰言るには「お前が盲目なんだ、それで迷っているんだ、そこで思つてもかなわぬ願いを持ち、それが得られず、ひもじくて飢えに瀕(ひん)しているんだ。これはお前にはつまらなく見えるだろうが、念仏のお

粥なんだ。お前は何も喉を通らない重病人なんだ、このお粥にはすべての滋養や妙薬が入っているんだよ、はやく食べよ」と、慈悲一杯のお勧めである。

私共は各々の胸にさまざまな願いを掲げた頭陀袋(ずだぶくろ)を掛けた乞食なんだ。信仰とか、よろこびとか、満足とか、幸福などをもとめ廻つて、それが得られず、空っぽの袋をかけて、空っぽで困ります、お願いです、恵んで下さいと、袋をひらけてねがう。

仏の仰言るには「お前のねがう物は、どれもこれも皆まよいを深め、欲望をつのらせ、苦しみ悩む物ばかりだ。仏を求め念仏すること自体が煩惱の満足を求めていることだよ。みな、空な物ばかりじゃないか。だから、お前にはこれ一つだ」と、袋の外側の底からグッと大悲の御手が入れた。たちまち袋が逆に裏返しになり、我々は誠に勝手な願いをしていました、申訳けありませんと、あやまりはてて、念仏が洩(も)れてくるのです。

私共の願いは、信仰をねがうこと自体、有難くなりた、い、明るくなり満足したい、といった己の利益を求める利己心を出ないのです。それを満たそうとの念仏でなく、絶対にそれが満たされない。それが可愛そうだからの念仏だと仰せられるみ仏の心を、無にして来た。それで仏のかたおもいが有難いと渴仰されるんです。

全く我々は碌な人間じゃないんです。有難がつて念仏を称えています、その念仏、それは、仏の体(からだ)です。ひもじくて仕様がなから、これを食べよといわれるままに、仏の体である念仏を食べて生きているんです。毎日の食物だって、皆、生き物です。米も麦も菜も魚も、生き物のいのちをとって食べて生きるよりほかない、憐れな

しかも残酷な生物の私なんです。かかる私をあわれみたまう大悲のみ仏がましますので、仏を食べ、魚を食べ、酒を飲み、こうして新春をすごしているのです。

(追記)

私と妻は一日に求道会館の仏様にお参りして木村さん夫妻におめでとうをし、渡辺さん所の新年の集りに加わりました、西興子さんと若奥さん赤ちゃんも見え、常音先生末娘さん夫妻も来られました。西興子さんと撮影不捨が有難いと話合いました。

二日は私の誕生日で歌の友が来て少し信仰談をしました。三日に三四人の年始客を捉えて信仰を語り汗みどろになりました。そんなことで五日にこの漫筆を書きました。

高原憲先生聞書

平岡 坦

あとがき

私は長崎に昭和十一年春参りまして世間との交渉が始まりました。人並に胸膨らませてこれに立ち向ったのでありますが、何か一つ歯車の噛合いが普通でない、見るもの聞くもの、私の周囲と私は水と油でどうしても完全に融けこむことが出来ない。ああではないか、こうではないかと色々工夫もしていたが、一向に効目がない。世間は私のこうした内心の疼きには一向におかまいなしでどんどん動いてゆく。

私は芯(しん)からこれについて行けない。一寸待ってくれ、何とか助けてくれと云っても聞いては呉れない。うろろろしている私を尻目に、世間様はドンドン突走っている。その果、私は遂に悲鳴をあげたが誰も気付いてくれない。者はない。そちらがそちらなら、こちらもこっちだと自棄っぱちになった積りでも仲々どうしておさまりはつかない。それははかない抵抗である、力尽きて私にもう正気で相手になることは止めてやろうと考えた。が、然しこの相

手は私が何を考えようと、それには少しも痛痒を感じないのである。そして私を追いつめて許さないのである。この悪戦苦闘は何処までも果てがないのである。それはもっともなことであって、角力していると思っているのはこちらばかりであって、むしろさんはそれは当り前の朝飯前のことである。こう気付いた時、私は全く途方にくれた。何と因果なことか。私は激しい孤独にさいなまされるようになった。立ち上る力もなく、しみじみと自分で自分をいとおしく見つめる丈であった。俺を知って呉れる人は無いか、よい友はないのか、真実を語ってくれる人は無いか、何が真実なのか。

朝に道を聞けば夕べに死すとも可なり、と教えられたことが本当に自分の事となってしまうた。

日中は何とか紛れているが、夕暮ともなると、この惨めな自分がひしひしと押寄せてくるのは何とも耐え難いものであった。こうして私は自分が苦しむと同時に、この苦しみ捨て場を家内に求める外はありませんでした。今晚も

又、夫が苦しむのか、いずれは気が狂うかも知れぬと思えば家内も胸の動悸が高くなるのを押えられず、私のために家内も同じような苦しみを味わうようなことになった。

当地に高原先生がおられること、この先生には自分は体を診て頂いているが、そうではない、心の病気を診て戴きたいのだとかねてから思っていました。そして聞法に座を同じくしたこともさもありましたが、私の憶病は表面何も無いような格好をして裸になって先生に立ち向うことから逃げていました。しかしながら、事態はいよいよそれを許さないことになりました。

川上清吉先生に診断を乞わんとした私は川上先生から高原先生の方に回され、三十一年の暮も押し迫った十二月二十八日、家内は意を決して単身矢上の山上に夜おそく、恐るおそる先生をお尋ねしました。そして先生にガブリと抱きかかえられ、久し振りに晴々として気持になり、家内はこの初対面で先生の総てを戴いたようなものでした。翌日から重症患者の私の手を引いて二人で矢上参りが始まったのであります。

それから八年近く、矢上参りの薬がきれると、心の疼きが顔をもち上げるとゆう次第で、人様の都合など考えてはおれないし、又先生も一度もお断りになるようなことがなかったようなわけで、再々お伺いいたしました。先生は勿

論病院のお仕事を持っておられ、私等との対話が終ったあと、夜九時過ぎから療養所の回診に向われるようなことになりました。段々お病気が重くなっていられる奥様を囲むお家族の方々には、先生をはじめとして、私達のこうした頻々と長時間の侵入にお家庭生活を大層乱されたことと申します。誠に相済まぬことを致しましたことです。

家内はもっと欲張っていました。当時の銀屋町の病院の先生の診察室には、その入口の所に、順番を待っていました、入り替り、立ち替る患者さんと先生との対話をじっとうかがっており、最後の患者さんのあと、家内は診察室に入るのではありません。とっておきの、どなたにも戴けない処方箋を戴いて帰りました。そして夜、そのおこぼれを私も頂戴するような次第でありました。

或る日、高原先生は家内に「平岡さんは今迄こまった時どうしておられたでしょう。さぞ苦しく淋しかったでしょうね」としみじみ仰言ったそうです。私はこの言葉をききまして、先生の溢れる様な和顔愛語が胸にしみ入るようでありました。

こうして、迷いに迷い、苦しみ抜いての二十余年の歲月を経て、私の生涯の問題解決は、高原先生とめぐりあえたお蔭で恵まれました。亀井勝一郎氏が『わが人生観』の中に「人生の一大事はめぐりあいである」ということを冒

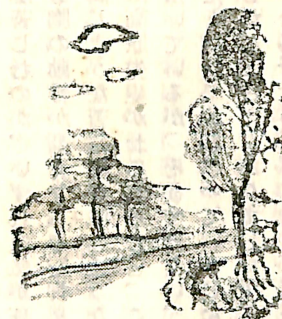
頭に掲げてあります。この言葉には私はたびたび深く肯いておし戴くような感情がこみあげて来るのであります。聖人が「遠く宿縁を慶べ」と仰言ったのは本当に尊い事実であります、もう私は一人ぼっちではありません。

又、高原先生はこう仰言いました。

「道と云う字は、首をひっさげて進む、と書いてある。道を求めるのにいい加減なことでは達せられない。いのちがけで進むことだ」

と。そのように、その開法の歩みを生涯を貫いてお続け下さった先生の仏法にまつわる厳肅なお姿を仰がせて戴く時、先生を介して、仏恩の深いことを思い知らされます次第であります。

昭和四十六年六月発行（非売品）聞思会。



念 仏 詩 抄

今、臨終

ひと息 ひと息

死んでゆく

死んでゆくまま

生きている

生きている今

今、臨終

念仏もうす

ひまはない

信心つくる

ひまもない

「汝を救う」の

仰せだけ

「ナムアミダブツ」の

仰せだけ

ナムアミダブツ

芸道に終りなし

三 遊 亭 円 朝

（彼の四代目、円喬にあたえた言葉）

お前がうまくなったと聞くたびに、わたしは自分がほめられるよりも嬉しく思うけれど、もしも、わたしが居なくなったあとで、お前をうまいとほめる人があったら、その人を敵だと思え。

いけないとか、まずいという人があったら、それはわたしは小言を言っているのだと思っておきき、芸人は死ぬまでの稽古だから。

つれづれ草（百六十七段）

兼 好 法 師

……人としては、善にほこらず、物とあらそわざるを徳とす。他にまさることのあるは、大きな失なり。品の高さにても、才芸のすぐれたるにても、先祖の誉にても、人にまされると思える人は、たとい言葉に出でてこそ云わねども、内心にそこばくのとがあり。つつしみてこれを忘るべし。おこにもみえ、人にも云いけたれ、わざわいをもまねくは、ただこの慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は、みずからあきらかにその非をしる故に、志つねに満たずして、つねに物にほこることなし。

木 村 無 相

ナムアミダブツ

お聞かせ

お聞かせ

お聞かせ

煩惱のただ中で

お聞かせ

「常於大衆中

説法獅子吼」

ナムアミダブツ

ナムアミダブツと

燃えあがる中で

お聞かせ

お聞かせ

お聞かせ

聖人となって

お聞かせ

お言葉となつて

お聞かせ

〃称我名字と

願じつつ

若不生者と〃

お聞かせ

お聞かせ

お聞かせ

お声となつて

お聞かせ

今、口もとに

ナムアミダブツ

ナムアミダブツと

称えあらわれ

お声となつて

お聞かせ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

今の今

昨日はすぎ去り

明日はまだ

わたしの人生

今日一日

今の今を

生きるのです

今のひと息

ひと息に

はなれたまねぬ

ナムアミダ

ひと息ごとに

ミダブツの

ご恩にただ

今の今

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

仰せ一ッ

臨終 臨終

今が臨終

みちびきたもう

親鸞聖人

一多証文に

〃信というは金剛心なり

知というはしるという

煩惱・悪業の衆生を

みちびきたもうと

しるなり――〃

みちびきたもう

みちびきたもう

われらが業に

しみいりたまいて

ナムアミダブツと

しみいりたまいて

ナムアミダブツ

ナムアミダブツと

みちびきたもう

みちびきたもう

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

今のひと息

今の臨終

死ぬときだけが

臨終でない

仰せ一ッ

仰せ一ッ

ただ助くるの

仰せ一ッ

ナムアミダブツの

仰せ一ッ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

因幡の源左同行曰く

まいろ まいろと

わしや氣をもんだ

南無の二文字

しらなんだ

ともしび

花田正夫

○
我は黒白をも知らぬ童子の如く、是非も知らぬ無智の者なり
(法然上人語)

はじめて上人のこの文を読んだ時、あまりに誇張されていると思ったが、七十になった今日、種々の出来ごとにふれて段々とこの通りであると私自身でうなづき始めた。

私共がもし黒を黒、白を白と正しく知る力があれば、人からだまされたり、自分を買いかぶったりしてやりそこなうこともなく、多々益々弁ずることも出来よう。古来の聖賢達は心血を注いで、生活を正しくし、心をしずかにし、澄みきった智慧を専ら求められたのである。

しかし凡俗の私共は、身びいきな心に防げられて、共に不完全な人間同士であるのに、我よし彼わるしと思い、老いてもその根性は消えず、他を責め自らも嫌われている。また何時か何処かに幸せがあるだろうという幻影に惑わされて、山越え野越えして行けども行けども幻滅の悲しみに沈んで愚痴と歎息が続く。こうして自分の無常の身にも気

付かず、ぐずぐずと一生は空しくはてる。

こうした泥沼ののたうちから何時までも足が洗えぬ身と知らされるにつけ、法然上人の衷心からの御勧め「かかる身を仏かねてしろしめして選びにえらばれた唯一の救いの道、ただ念仏して弥陀にたすけられよ！」の悲心にふれるのである。

○
昭和四十八年十一月十八日。

無碍光仏のみことには未来の有情利せんとて、大勢至菩薩に智慧の念仏さすけしむ
(正像末和讃)

私が医学生ころ、小鳥を飼っていた。当時乳児死亡率が高かったが、小鳥は医師も産婆もいないのに、立派に巣造りし、卵を温め、餌をあたえ、時が来ると直ちに巣立ちさせる事に驚いた。この智慧の働きが人間に發揮できたらなあ！に願った。思うに小鳥のこの働きは、親と雛とが一体になりきった自然の発露であろう。

さて、菩薩には、同事の行(ぎよう)がある、同事とは相手の身心と同心して行く修行である。維摩經に居士の病は、衆生病むためであるとあるのはその消息を知らされる。南無阿弥陀仏とは、煩惱に障えられて苦海の流転をさだめとする我等をそみなわし、「衆生苦惱我苦惱、衆生安樂我安樂」と、阿弥陀仏が我等と一体化された慈悲と智慧のいきたまことのすがたである。我等の智眼の暗さに迷う時御名を呼べばそこにひかりが射しそめ、我等の罪障の深さを歎くにつけ、同心して下さるみ誓いを仰げば、もろもろの罪禍がおのずから転化されてゆく御恩は謝すべき言葉もない。

○
昭和四十九年 九月十六日

浄土宗の人は愚者になりて往生す

(末灯鈔六)

夜空にかがやく無数の星も、太陽が光を放つとその影を消されてしまう。互に智慧をあらそい合う人々も、ひとたび無限の仏智の光照をこうむると、おのずから愧じてその愚にかえらされる。法然上人が愚痴、親鸞聖上が愚禿、源信僧都が頑魯と名告られたのも、単なる謙遜の言葉ではない。しかし信心の智慧がひらけぬ間は矢張り持ち前の智慧や智識にたよって、智愚をきそい争う心はやまない。

法然上人の吉水の禅房で「親鸞の信心も師上人の信心もひとつ」と何かの時に聖人が語られると、性信や勢観や念

仏房が「もってのほか」といきり立った。逐に上人の御前に出て事の次第を申上げると「法然の信心も親鸞の信心も如来よりたまわった信心だからひとつである」とお答えになった。思うに両聖共に、手にももの持たずに、ひたすら本願のまことをいただいていられるのに、性信は学問、勢観は持戒、念仏房は道心をたのんで、仏智のひかりを全身にうけていないところに喰い違いがあった。

「お慈悲一つで人生手放し」のところに、師弟一味の浄土の道がひらけ、愚者にかえっての信の旅姿があらわれる

○
昭和四十九年十一月九日。

生死の苦海ほとりなし、ひさしく沈める我等をば、弥陀弘誓の船のみぞのせてかならずわたしける
(高僧和讃)

私には子が無いが、兄は二人の子持ちである。兄はよく「お前は淋しいだろう」と慰めてくれたが、その長男が幼時の大病から精薄になっていて、「あの子のことでああ」と歎息しながら、死ぬにも死にきれぬと悩んでいた。

壁ひとえ、子があつて泣き、無くて泣き、とよく聞くが文字通りにそれがうなずかされる。

これと同様に、智者には慢心の毒、愚者には愚痴の毒がつき、善人は金の鎖、悪人は鉄の鎖に縛られる。大無量寿經に「宅有れば宅を憂い、宅無ければまた憂う」と煩惱の奴隷に等しい私どものどうしてみようもないありさまを、「生死の苦海ほとりなし」とお見抜き下さって、悲心切々として呼びかけたもうて、不沈の船を浮かべて、老少善惡のへだてなく、はやく乗れと寄り添うて下さる。

仏陀の末通った慈悲は、私どもにも出来ることまでをして下さるという盲目の愛からの過保護ではない。私共の能力の限界を知り尽くされて、どうしても無くってはならぬ、またそれさえあれば十分なものにあたえて下さるのである。噫！人と生まれてこの仏心を聞く時、身にもつ罪障が、氷が水となるように、そのまま転じて、念仏となつてあらわれるのである。

昭和四十九年十二月二十二日。

汝好く是の語を持って、是の語を持つてとは即ち是れ無量寿仏の名を持ってとなり

（觀無量壽經）

一昨年九月、八十五歳で亡くなられた白井成允先生が、長女の明子様に

「今後の生を念仏の中に生きて下さい。念仏申している

私も、池山先生や近角両先生にさき立たれましたけれど御在世の時は、京都とか東京にお訪ねして親しくお導きをうけましたが、今やお姿にもお声にも触れることが出来なくなつて、私の内から浮かび出るお念仏の中に、先生方のお心に浴することが出来、何時でも何処でもお会い出来るたのしさを、今にしてしみじみと知らされます。

昭和五十年二月九日。

奇なるかな、一切衆生ごとく仏性を有す

（華嚴經より）

知友から、生命の尊嚴のいわれをたずねられた時、即座に「一切衆生ごとく仏性を有す」と仰言つた仏語が思い出された。それは、老少善惡の別なく、善惡智愚を問わず、だれ一人として仏性を持たない者はないとの仏心にうつる衆生の実相であつて、そこに生命の尊嚴があるとお答えした。

法華經の中に、常不輕（じようぶぎよう）菩薩は、一切有縁の人々を拝みながら「あなたも仏になれる人だ」と讃え続けて、その行（ぎよう）一つで成仏せられたとある。

子を知るに親にしかずと云われるが、本当の理解は相手の身になりきつてはじめてその人を知ることが出来る。菩薩の聖行に、同事の行がある、病人には病人と同じ、老人

うちに必ず途はひらけてくるのですから」

と仰言り、更に、「いつどこでも、もし父のことを思い出すことがあつたら南無阿弥陀仏と唱えて下さい。念仏の中に私は生き続けているのですから」

と書き残して逝かれました。

それにつけ、釈尊が王舎城の悲劇の主人公の韋提希夫人と常隨の阿難尊者に「無量寿仏の御名一つをたもて」と勧められて、觀無量壽經の結びとして下さつた御心がしみじみと渴仰せられるのであります。仏の大慈を仰ぎ、お念仏をともしびとして人の世をたどる時、求めず願ひもしないのに、心の闇にひかりが射しそめ、茨の道も自然にひらけて、罪障があるまゝま障りがさわりとならず、それを越えて、彼岸への道がひらけるのであります。

しかもその道を進む時、釈尊をはじめ、法然、親鸞の両聖がよき友となつて寄り添うて下され、孤独の人生が一人ぼっちでなくなり、賑やかな浄土の旅が始まるのであります。

私共は毎日沢山の人々と語り合い交際をいたしますが、その多くは表面だけの触れ合いで、心は行き違いに終り、やがて離ればなれになります。人と人とが永遠の手を結び心の通いを得るのは、ひとり念仏の中だけと知らされます

には老人と同じで、真に手を執り合う行である。私共は利己の一念に障えられて、自己中心の行動しか出来ないけれど、仏陀の限らない智慧と慈悲は一切の衆生をわが一人子とみなし、そこに尊い仏性を私共凡愚のいのちの深みに見出して下さり、それをはぐくみ育てて成仏せしめようとあらゆる御苦勞を下さつて下さる。

しかし私共の眼は煩惱に障えられてその尊い仏性を見出すことが出来ないが、仏陀の正しい智見による実語を信じ、そのたしかさを知られるのである。私共はこの徹底した仏語によって生命の尊さを信じ、仏陀や菩薩方に拝まれているいのちを大切に、成仏への道をたどらせていただきたいものである。

急 告

池山栄吉先生著、「絶対他力と体験」と「信を行く旅人」は、品切れになりましたと、京都の榊原徳草師からのお知らせであります。

半切に印刷された池山先生の名号はまだ残っている由であります。取り急ぎお知らせ申し上げます。

あとがき

一月もあつと云う間に過ぎて、二月も終りになりましたが、世上の嵐はきびしく、一人々々がしっかりと脚下をたしかめ、心の羅針盤をたよりに方向を見失わぬようにせねばなりません、私自身も、

根をしめて風にまかせる柳哉
という古句を思い浮かべ念仏させて頂いて
おります。

○
近角先生の御講話は、教行信証の中、信巻の中心を述べて下さっています。私共、自らの業に縛られて、恰も獄中に閉じられている囚人でありますが、このたずかるべからざる者、一切から捨てらるべき者を見そなわして大悲やむことなく建立して下された本願の真実心の微到によつて、身は娑婆に居るまゝ、心はみ仏のもとに帰らせて頂けることの有難さを身にしみて知られますことです。

福島先生はお弱りになつて原稿は頂けません、《読書と求道》の序文から連続して頂いております。そこに御自身の信の旅姿をそのままお述べ下さっています。私共の求道の枝折りとさせて頂きましょう。
柳瀬様は、正月に、信のギリギリのとき

ろをお味い頂いて懇切なお原稿を頂きました。ひとえに仏の恩召し、本願力による点を知らされたいことです。

平岡さんも、開書のあとがきから、よき師にめぐり会えたことの喜びをのべて下さいましたものを頂きました。

木村無相さんは、週刊朝日の正月号で、放浪の俳人、山頭火氏とのめぐり合いを紹介されました。腰痛もすこしは快方とのことですが寒中の用心を祈念しております。

「ともしび」は中日新聞に出しましたものを中心に誌しました。歳末には呉市で脉管学研究所長の西丸和義先生から「生命の尊厳について」の感想を述べよとのこと、一切衆生悉有仏性と仏が仰言ったことを新らしく讃仰させて頂きました。一切の人々の生命の深みに仏性を見出して下さる仏陀、その開覚に生涯を貫かれ、御入滅後にもいよいよその教えの実証されますことは何という尊いことでありましょうか。但し、木の中に火の性はありましても、それで木を焼くことは出来ません、他から点火させられてはじめて木は燃焼するのであります。よき人の導きによつて仏性の火の焰々と燃えはじめることであります。

〈御案内〉

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。

市バス、新郊通り一丁目下車。

○毎月二十四日午前、午後、教西寺法話会。

市バス、御器所通り、又は、北山下車。

○三月十六日に名古屋の教育会館で午前九時半から榊原徳草師の「ただ念仏して」の講話。午後一時半から一道会館で「仏かねてしるしめて」の題で同師の法話会を催します。御来会下さい。

定価 半年 五〇〇円 (送共)
一年 一〇〇〇円 (送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 吉野穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七